

## 手渡しパスはコンビネーションの初期の姿か？

千早赤阪村立赤阪小学校 東條憲一

### 1、はじめに

夏休みには南河内ブロック大会を行い、シユートボールの授業プランを考える取り組みをした。その時に自分の構想を敲き台にして南河内ブロック部員で実践計画を考えていった。まだまだぼやけていた実践構想だったが、ブロック委員の前で話すことで、自分が何を考えているのか、どんなことをしたいのかがより鮮明になった。

### 2、実践の構想

#### ①個人での限界

シユートする場面というのは、敵をかわしてシユートやフェイント、投げる強さ、方向、タイミングなど個人技術にかかわるところが大きい。やすれば、能力主義に陥り低学年では特に「あの子は下手だから・・・」「いくら言っても出来ないから・・・」と見捨てられる場面に「ここで乗り切ろうとするのだが、「わかっているけどできない」子どもたちの中には存在し、グループの仲間からの押し付け(?)や追い込

みで学習を進める姿に出くわすこともある。

今回は、1対1で「わかっているけどできない」状況になった時、個人主義からの脱却を図るために、2人でのコンビネーション学習に移ろうと考える。

#### ②コンビネーションの初期

2人で攻めるときにボールが1つだと、そこにはコンビネーションが発生する。シユートボールでは特にこちらからの指導がなくても、子どもたちは反対側で待つ動きが出てくることがある。

コンビネーションの難易度は、ボール保持者から同心円で広がっていくほど、難易度は上がっていく。(投げる強さ、方向、タイミング、角度など。また、受け手の技術も要求される。)

先ほど述べたボール保持者の反対側で待つ動きは、低学年のコンビネーションとしては難易度が高いと考える。ボール保持者の反対側にある重要空間で待つてはいるが、ボールを受けられず逸らしたり、山なりのボールを投げて守備に追いつかれたりと、なかなかシユートできない場面をよく見る。ましてや、個人技術の低い子にとつてはまさに「シユートすればいいとわかっているけど、できない」状況が生まれてくる。偶発的なコンビネーションプレーではなく、必然性のあるコンビネーションプレーを使って、攻撃のコンビネーションの質を深めていきたいと思っている。

そこで必然性のあるコンビネーションプレー

として、攻めの2人が近づくことで、コンビネーションを取りやすい状況を作ろうと考えた。

ただ、近づくだけでは守備も守りやすくなるので、クロスする状況を作り、手渡しパスで必然的にノーマークになれる状況を作っていくように思う。

#### ③ハーフコートかオールコートか

実践が始まる前は、オールコートで学習する意味が理解できなかった。オールコートの攻防切り替えは、ボールゲームの醍醐味ではあるが、そこで何を教えるのが曖昧になってしまう感じがあつたのでオールコートの学習に踏み切ることはできなかった。ハーフコートでしっかり学習をすすめることが、今後のボールゲームを取り組むにあたって、攻防入り乱れる取り組みをしたときにでも生きるのではないかと考え、今回の学習はハーフコートで行った。

#### ④友達観の変容

子どもたちの感想を交流し、技術認識や、他者理解、自己肯定感や他者肯定感を深めていきたい。感想文に技術に関する内容を多く出させていきたい。技術を媒体に友達観を変容させ、子どもたちをつなぎたいと考えている。

### 3、実践計画(全十八時間)

#### 1次 オリエンテーション(1時間)

- ・どんなシユートボールにしたいか
- ・グループ分け

・今後の流れ

2次 ボールなれ（2時間）

・新聞をおとそう

・的あてゲーム

3次 1対1（4時間）

・せめの作戦を考える

・守りの方法を知る

・守りができているか

チェックする

・今までのビデオ確認

### 学習の進む必然性

わかっているけど、できない

←2人のコンビネーションで攻めよう

4次 2対1（4時間）

### 学習の進む必然性

反対側で待っても得点できていない

←手渡しパスをつかって攻めよう

・手わたしパスで守りをだまそう

・今までのビデオ確認

### 学習の進む必然性

得点をたくさん決められるようになった

←守りも増やして欲しい

5次 2対2（4時間）

・攻めの作戦をためていこう

・プレスとマンツ―

・今までのビデオの確認

6次 シュートボール大会（3時間）

4、全体目標

### 攻め

1人での攻め

・まとのあいているところをねらって投げることが出来る

・フェイントを使って守りをだますことができる

2人での攻め

・手渡しパスが出来る

・開いている場所で待つ。（重要空間）

・2人のコンビネーションを使って攻めることができる

### 守り

・ボールと箱の間に立つことができる。

・手を大きく広げて守ることができる。

・プレスディフェンス（1人に2人で守る）

ができる

・マンツ―マンディフェンスができる

・グループ学習で、協力して学習を進めることが出来る

・グループで、準備をすることが出来る

・グループで、準備をすることが出来る

5、学級の児童

男子10名、女子8名の単学級。全体的にはまじめで、しっかりした子が多い。素直。1年生の時に体育の授業でシュートボールを行っている。その時は2対2まで学習を進めている。休み時間は全員が運動場に出て遊んでいることがほとんど。私が気になる児童は下記の4名。

Aくん

支援学級在籍。高汎性発達障害、トウレット障害。昨年度までは通常学級に入り、保護者がのこを非常に悩んでいて学校へ頻繁に相談をしにきていた。しかし、今年度は児童も落ち着いて生活を送っているおかげか、保護者も安定しており、学校への相談もほとんどなくなった。運動は好きで、地域のサッカークラブに所属。

Bさん

毎日のように仲間とぶつかる。自分にされたことは些細なことでも、その日の気分によつて許せない時があり、訴えてくる。自分もするくせに、されたときだけすぐ先生に言う。周囲はよく思っていない。孤立気味。「私は幼稚園の頃から嫌われている」とつぶやいたこともある。

2学期末の個人懇談会で保護者の方から「うちの子はいじめられているのではないか」と少し怒り気味に話をされる。運動は得意。

Cさん

体は小さく、非常におとなしく、運動が苦手。

それでも黙々とがんばる。今回の学習で一番できるようになってほしいのは彼女。

Dくん

学習に集中がなかなかできない児童。性格はいつもニコニコしていて、お手伝いも進んでくれる。テストにとっても執着していて、100点を取りたいといつてもできないと「時間すぎる。「おれ覚えよう」と思っても覚えられない」と自分の苦勞を泣きながら語ったこともあった。地域のサッカークラブに入っている。

## 6、実践報告

十月四日(教室)

1時間目 オリエンテーション

グループ学習で本格的に学習を進めるのが初めてなので、まずはこのシュートボールの時間をどんな時間にしたいかを考えていった。子どもたちは、だれもが上手になりたいとかできるようになりたいと思っている。そこを確認し、「みんなが」ということを押さえていくことがねらいだった。

「みんな考えてできるようになるシュートボール」という単元目標を共通理解した。その後、今回の実践の大きな流れ、グループの発表、グループ内の役割を決める時間にした。今回のグループは子どもたちに決めさせることはせず、私の方でグループを決めた。グループは4グループ作り、1グループ4〜5人。

十月十一日(木)

2時間目 色々なボールをなげてみよう

壁の新聞を早く落とそう

5種類の大きさの違うボールを用意した。(0号ボール、バスケットボール、ドッジボール、ソフトバレーボール、フラフトのボール) 5種類のボールの中から1つ選んで、壁に張っている新聞を早く落とそうと取り組んだ。(以下壁新聞)

各班が選んだのはドッジボールが2班、バスケットボールが2班だった。壁の新聞を落とすゲームでは1番2番に落ちたボールがバスケットボールだったので、次は条件を揃え、全班0号ボールで壁新聞を行った

十月十五日(月)

3時間目 壁の新聞を落とそう、的あてゲームをしよう

今回も壁の新聞を落とす活動をした。そして、運動場に出て半径2mの円を書き、その円の外から、中心にあるダンボールにむかって全員が一斉に的を当てる的あてゲームを行った。今回のシュートボールは運動場で行うようにした。円を書きやすかったのが理由である。

十月十七日(水)

4時間目 投げる姿をビデオに撮ろう

今日はいよいよの雨。体育館には円が無いので、全員の投げる姿を前から、横からビデオで撮った。

十月十八日(木)

5時間目教室 的に当てられるかな?

今日もまたまたいよいよの雨で、運動場でのあてゲームができなかった。そこで急遽、体育館でのから3m、4m、5m地点から1人5回投げて何回当たるかを調べた。そして、結果から今回のシュートボールで行う半径を決めた。Cさんは投げる腕と同じ方向の足を出していたのでコーチは違う足を出していることを指摘した。すると3回目にあてることができ、コーチも笑顔になった。

十月十九日(金)

6時間目教室ビデオ確認

学活の時間にビデオを見た。子どもたちは自分の体育での時間の動きをビデオで見たことがなく、自分の姿を見るのは恥ずかしそうだった。

十月二日(月)

7時間目 1対1のシュートボールをしよう

今日から守りありのシュートボールを行った。1対1の学習を行うに当たって、今回は1時間の学習の流れを学習した。体操↓練習↓ゲーム↓振り返りの流れである。

十月二四日(水)

8時間目 チームでの的をたおす作せんをかんがえよう

今回は攻めの作戦を考え、通用するかを学習のめあてとした。1年生の時に学習しているからであろうか、どれものを得た作戦ばかりだと感じた。

十月二十五日(木)

朝の会・シュートボールだよりを読む

9時間目 まもり方をどうすればいいかかんがえよう

今までのシュートボール分の個人得点集計表を載せた、シュートボールだよりをもとに、教室で話をした。1対1では全員得点ができていた。Cさんは2試合目は0点だったが、3試合目は5点を取った。今回の得点表から、苦手な子に対する言葉や働きかけが出ればと思ったのだが出なかった。

十月二十六日(金) 教室・朝の会

守り方のポイントをおさえておきたいと思い、ポイントをとめたシュートボールだよりを作った。守り方のポイントを子どもたちと対話しながら確認していった。そして、おさえたポイントをとめた、シュートボールだよりを配った。

十月二十九日(月)

10時間目 守りのチェックをしよう

この日の休み時間に、Cさんに「ぐるぐる作戦とか、だまし作戦とかわかってる？」と聞く

と「わかっている」との答えが返ってきた。「わかっているけど、でけへんの？」と聞いたら「うん」と答えた。全員得点、そして「わかっているけどできない」Cさんの言葉を受けて、次の段階に進むことにした。

十月三十一日(水)

11時間目 2人でのせめ方を考えよう

今日から2対1を行った。2人の攻めは2年生になってからは初めてだったにもかかわらず、全てのチームにおいてボール非保持者はボール保持者と正反対の場所(以後6時の位置)に行つて、パスを受けたり、シュートの外れたボールを取ろうとしたりしていた。ゲームが終わった後、チームごとに2人の攻め方で見つけたことを書くこうとグループノートに書かせた。その後、全員を集めて「何で、ボールを持つていない人はここにいるの？」と6時の位置にいることを聞くと「だつて近くにいたら、守りがパスした時にすぐ帰ってくる」との返事が。賢いなあと思いつながら、「でも、中にはパスを後ろに逸らしたり、ボールを貰つてもシュートするまでに時間がかかっている人がいたよ。そんなやつたら、一人でシュートしたほうがたくさん得点を取ることができるんじゃないの？」と言ふと「でも、一人でシュートしていたらわがままや」と言う。「そうなん？」と聞くとみんな「うん」という。このようなやり取りの後、今回の実践の中心である「手渡しパス」のことを少し

だけ子どもたちに話しをした。

「さつきも言ったけど、パスをしても後ろに逸らしたり、シュートまで時間がかかったりしている人もいたよね。でも、シュートボールの最初の時間にも言ったけど、みんなうまくなりたいって思っているし、上手な子だけが得点しても苦手な子は面白く無いね。そこで先生が次の時間、上手な人も苦手な人も得点が取れるであろう、必殺の作戦を教えます。楽しみにしておいて。」

十一月五日(月)

12時間目 手渡しパスを使ってせめよう

いよいよ今日から手渡しパスを使って攻める学習に入る。私の心はドキドキしていた。正直に言つて今までの学習は子どもたちが乗っているように感じなかった。理由を考えていたのだが、1年生の時に同じようなことをやっているのが大きいと思われる。今日がその転換期になるのではないかという思いがある反面、コケたらどうしようという気持ちもあった。

はじめに、手渡しパスの説明を行い、そのやり方を子どもたちの前で示した。

2人が正反対の方向に行くこと、2人が重なる時ボールをもっている人は内側を通ること、ボールをもらったらそして各グループで、手渡しパスの練習をした。なかなか難しいらしく、ボールをポロポロ落としていた。

しかし、ゲームが始まってみると、手渡しパ

スが意識の中にあるおかげか、子どもたちの動きが変わった。今までは、2人が出来るだけ離れ、離れたままで動こうとしない動きが多かった。だが、2人が近づき、重なるうとする動きが出ることで、守りが騙されている姿も見られるようになった。私自身とても興奮した。子どもたちが手渡しパスを行い、守りを騙そうとしている姿があり、失敗してもその意図が汲み取れ、面白かった。

十一月六日(火) 教室

13時間目 手渡しパスのビデオを見よう

昨日の手渡しパスを学習した時間のビデオを見た。私自身がはじめに「このビデオはおもしろい」と言ったからか、子どもたちも楽しんで見ていたように思えた。手渡しパスを使うことで、守りがだまされ、ボール保持者がノーマークになる状況が何度か現れた。ビデオをスローにして見るとそれがはっきりわかる。1人の男の子が「おれ、完全にだまされてん」と楽しそうに話してくれたので、そのビデオを見ることに。すると、完全にノーマークになっている姿が見られ、その姿を子どもたちが見た時、「おっっ!!」と声が上がリ、自然と拍手が起った。相手をだましてノーマークの状況を作り出す事の面白さが少しでも分かってくれたのかなと思っ

た。中には手渡しパスをしようとしているができていない姿から学習も行えた。ボールを渡した

後、2人が離れていかなくは守りをだますことができないことをみんな確認した。

十一月七日(水)

14時間目手わたしパスのポイントを知って、まもりをだまそう。

昨日ビデオを見た時に、「手渡しパスが難しい」といつている子どもが何人かいた。ビデオを見ていてもボールを落としている姿も見える。そこで、手渡しパスを成功させるためにはどこに気をつければいいのかを3つのポイントを与え、チームで考えた。

その後、ゲームを行った。今回のゲームでは前時ほどの興奮はなかった。なぜそう思ったのかを後でビデオを見てみると、よく分かった。

子どもたちはそれほど、手渡しパスで守りをだまして得点しようとは、思っていないことが分かったからである。

気になったので何人かの子どもたちに話を聞くと、手渡しパスは難しいし、そんなことをしなくても得点できるからだということだった。確かにその通りで、子どもたちに守りをだまして、フリーの状況を作つてまで得点するという必然性がないのである。そこで明日からは2対2のシュートボールに移り、少しでも守りをだますことが見られたらと思つた。

十一月八日(木)

15時間目攻めの作戦を作つていこう

ゲームが始まっても手渡しパスはあまり出てこない。攻撃の2人は6時の位置にいて、1対1の状況が2つ出来上がる様子になっている。守りはマンツーマンとプレスの動きが出ているが、考えずにプレスに行つてくれているおかげで、1人がノーマークの状況が生まれており、子どもたちの動き直しや、手渡しパスの動きからうまれたノーマークではなかった。1対1の状況を作りさえすれば、そのうち得点ができてしまうから、子どもたちはわざわざ時間のかかる手渡しパスを行う必要もない。なかなか得点ができない状況でないと手渡しパスが出てこないと考え、段ボールの数を次の時間から減らし、的を小さくしようと考えた。

十一月二日(水)

16時間目 せめ方かんがえよう

久しぶりのシュートボール。約2週間ぶりだ。今日からの減らし、守りをだまさないといけない状況を作つたのだが、だまさなくても得点が取れてしまうこともある。守りのレベルアップが急務だとも感じ、子どもたちと話をすることに。話していく中で苦手な子をフォローする考えが1つの班から出てきた。守るときに「できない子」がいればもう一人の子がフォローに行き2人で守る(プレス)を意図的に作ることを考えた。ただし、時間が無くこの考えを他の班に広める事はできなかった。

十一月二日(木)

17時間目 最後のチェックをしよう

ダンボールの数も減り、なかなか得点できないようになっていっている。そこで、子どもたちに「得点が取れてないよ、どうするの!」とゲーム中に呼びかけ続けた。見ている子どももから「手わたしパスをしろ!」という声が聞こえる。また、チームごとに暗号を考えたり、サインを送ったりして手わたしパスを成功させようとしている姿が見られた。

十一月二六日(月)教室

18時間目 2対2のビデオを見よう

「手わたしパスをすることによって生まれる守りと攻めのズレ」のシーンを再確認した。手わたしパスをすることで、少しでもシュートを打つ隙を生み出すことができればいいが、だましきれずボール保持者に守りが2人ついている姿もある。その時に非保持者へパスをすれば、シュートチャンスが生まれるのではないかという学習をした

19〜20時間目 リーグ戦をしよう

リーグ戦の状況を分析してみると、子どもたちはまずはじめに6時の方向でパスを行う行動をとっていた。その後、得点ができない状況が続くと、手渡しパスを行う行動をとる。得点できない状況を打破するためには手渡しパスをすればいいと考えているようだ。中にはボール運

動が苦手な女子のペアは必ず手渡しパスを行う動きをとっていた。Cさんは手渡しパスを自分から行わなかった。個人でボールが来たときはシュートすることをしていた。実践後半になるとようやく得点をとることができていたCさんはシュートして得点をとることの喜びが大きく、相手をだましてシュートするというところまでは進んでいなかったと思われる。

### 実践を終えて

実践の構想を練っている時は、手渡しパスをすれば子どもたちの動きが劇的に変わったらどうしよう!という、淡い期待を抱いていたのだが、こだわりながらも、実践が始まってみると、習熟する時間をあまり取らなかった。ここに私のブレがある。

なぜブレたのか?単純だが「手渡しは作戦の1つで、その作戦を遂行するかどうかは子どもたちの判断だから」である。

シュートボールの実践のまとめとして子どもたちに実践の感想と、いくつかの質問をした。その中で「し合中、どんな時に手わたしパスをつかえばいいですか」聞いたところ、18人中15人が「なかなか点が決まらないとき、パスがつかえない時」と答えている。残りの3人中2人は「むずかしい、ボールを落とすので」使わないと判断している。

何人かの児童の最後の感想を載せて、報告を

終えたいと思う。

Aくんと同じチームの児童

「シュートも手わたしパス・・・など頭をつかってシュートボールをしている。みんなだんだんシュートボールがうまくなっている。このチームでよかったと思った。今日のせめめるとき、Aくんとやつてた。手わたしパスでだましました。うれしかった。でもはずした。くやしー!」

Bさん感想(原文)

「さいごはできなかったけど、とてもとても楽しかったです。めいっばいできたけど0点しかあたりませんでした。とても楽しかったです。」

Cさんと同じチームの児童

「おわるまえにとくくのせいかわからないけど、Cちゃんがシュートをうまくなれてうれしかった。きょうのしあいでもCちゃんがけつこうつよいシュートで1点をとってうれしかった。もう1点Cちゃんがとってうれしかった。」

Dくんの感想(原文)

「きょうまもりでばーるととてうれしかったです。きょうかかってうれしかったです。1かげつはんやてうまくなてうれしかったです。きょうだんぼーるおあてられなかつたけどにかくたのしかたです。」